

マイ スコープ

ツメナガホオジロの渡来

上越市 古川 弘

2001年12月31日頸城村浮島集落の北に広がる水田で、ヒバリ40±羽の群れの中に本種の冬羽雄1羽を発見。翌年1月2日同地で2羽、翌日には冬羽の雄2羽と雌1羽合計3羽を確認した。この3羽は1月6日にも同地で観察された。またこの群れとは別に、1月3日に頸城村森下集落の北の水田で、ヒバリ、カシラダカ、スズメなど30羽程の群れの中に冬羽の雄2羽を発見した。その後浮島の方には1

月7日に雄1羽、1月29日にも雄1羽、2月10日にも冬羽の雄1羽が観察され、その後は現れていない。なお、このツメナガホオジロは大原淳一氏はじめ何人かの鳥仲間によって観察された。

本種の上越地域での記録は、「雪国の鳥を訪ねて」に1992年と1995年のものが記されているが、1995年以降一年おきくらいに観察されており、今では珍しくなくなっている。



雪の中のツメナガホオジロ（冬鳥の雄）（2002年1月3日、頸城村浮島北の水田で、大原淳一氏撮影）

新潟市鳥屋野潟で越冬するハクチョウおよびガンの調査報告 (2000年10月～2001年3月)

西蒲原郡潟東村 岡田成弘・新潟市 大林正人・大林尚子

1. 調査の目的

新潟市南部に位置する鳥屋野潟は、面積1.67km²、県内最大級の湖沼で、水鳥をはじめ多くの野鳥が飛来することで知られている(石部, 1991)。しかし、越冬する大型水鳥について1シーズン通じた調査報告はこれまで見られないため、2000年10月20日から2001年3月30日までの約半年間毎週定期的に調査を行い、ここで越冬するハクチョウ類とガン類の個体数変動についてまとめてみた。

2. 調査場所

鳥屋野潟(湖面中央から島にかけて望むことが出来る桜木インター付近、島の脇、弁天橋付近、上沼周辺のアシ原を望む産業振興センター裏の鳥屋野公園の4か所)及び清五郎潟を合わせ合計5か所を定点とした(図1)。

3. 調査時間及び方法

2000年10月から2001年3月まで、毎週金曜日

の夜明けから約1時間で各定点を順に回り、双眼鏡及びスコープを用いて全数のカウントを行ない、飛び立ち前に計数を終了した。金曜日を選んだ理由は、週末には釣り人や公園利用者などの人為的影響が大きく、正確なカウントが難しくなるためである。

4. 調査結果

1) ハクチョウ類

2000年10月27日から2001年3月23日までの約5か月にわたり越冬するハクチョウが観察された。初認は2000年10月27日、終認は2001年3月16日であった(表1)。

オオハクチョウとコハクチョウの2種類が観察されたが、コハクチョウが多く最高2430羽、オオハクチョウは最高38羽、合計で2468羽(いずれも2000年12月22日)であった。当初2種類を分けてカウントしたが、厳冬期は夜明け後も休眠する個体が多く、しばしば種

鳥屋野潟略図及び調査地



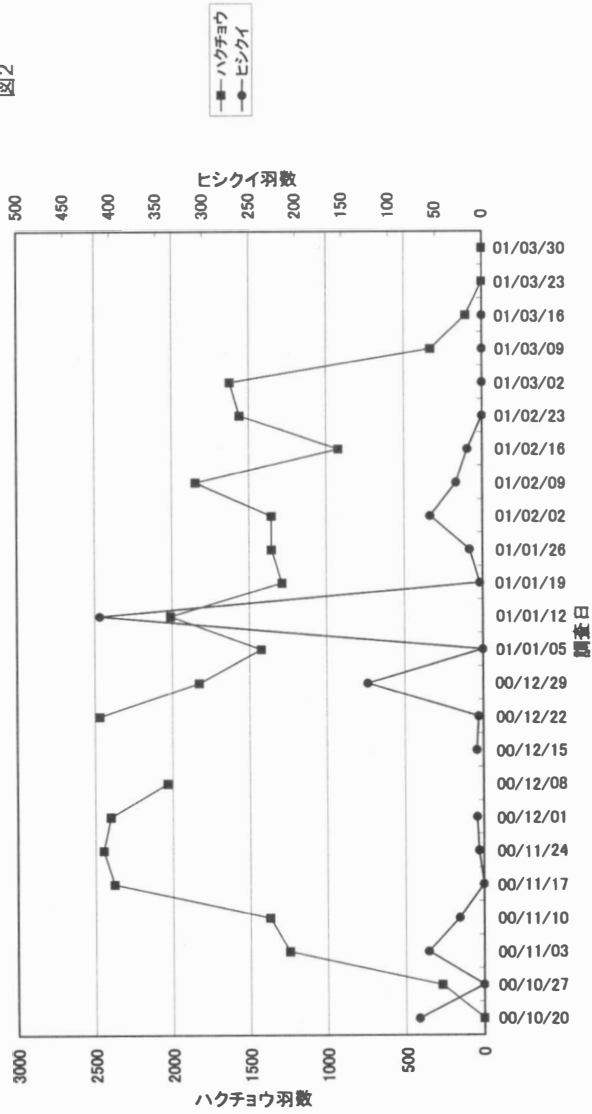
図1

表1

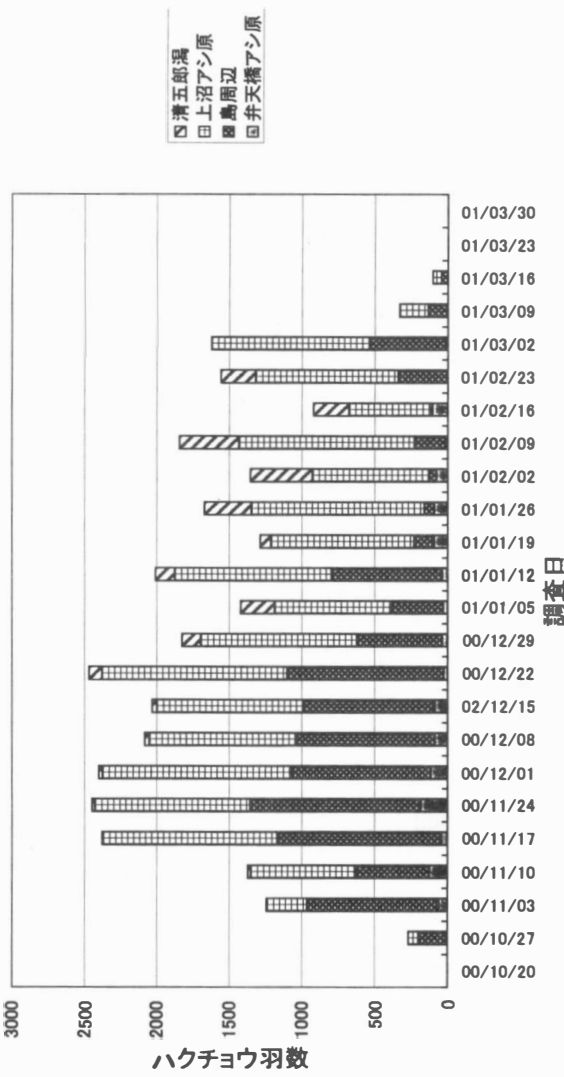
鳥屋野潟で越冬するハクチョウとヒシクイ数推移

| 調査日 | 10/20 | 10/27 | 11/3 | 11/10 | 11/17 | 11/24 | 12/1 | 12/8 | 12/15 | 12/22 | 12/29 | 1/5 |
|---------|-------|-------|------|-------|-------|-------|------|------|-------|-------|-------|------|
| ハクチョウの数 | 0 | 289 | 1246 | 1374 | 2378 | 2447 | 2400 | 2032 | 未調査 | 2468 | 1825 | 1423 |
| ヒシクイの数 | 0 | 69 | 0 | 59 | 26 | 0 | 5 | 7 | 未調査 | 7 | 5 | 123 |
| 調査日 | 1/12 | 1/19 | 1/26 | 2/2 | 2/9 | 2/16 | 2/23 | 3/2 | 3/9 | 3/16 | 3/23 | 3/30 |
| ハクチョウの数 | 2009 | 1288 | 1355 | 1355 | 1844 | 922 | 1559 | 1622 | 331 | 105 | 0 | 0 |
| ヒシクイの数 | 0 | 411 | 3 | 14 | 56 | 28 | 16 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

鳥屋野潟で越冬するハクチョウとヒシクイの個体数変動



ねぐら場所別にみたハクチョウ数の個体数変動



の識別ができなかったため、2種合わせてハクチョウ類合計数とした。亜種アメリカコハクチョウは上沼側で最高2羽が観察された(2000年12月8日)。

11月から12月は主に島周辺・上沼側・弁天橋側でねぐらをとる個体が多く約2000から2400羽台で推移した。1月から2月の積雪期は上沼側と清五郎潟でねぐらをとる個体が多く、約1500羽前後で推移した(図2、3)。

夜明け後1時間から2時間の間にほとんどの個体が飛び立ち、日中ハクチョウ類は見られなかったが、積雪の多い厳冬期は1日中潟に留まっている群れが見られた。

ハクチョウのねぐらは県立自然科学館脇のアシ原から島周辺、上沼側のアシ原周辺(写真1)、弁天橋側のアシ原周辺、及び清五郎潟(写真2)の4か所に集中していた。また嵐が無く穏やかな日は湖面全域に分散していることもあった(図4)。

2) ガン類

ヒシクイ：観察されたヒシクイは亜種オオヒシクイのみで、10月27日から2月23日までの間観察され、最高個体数は1月19日の411羽であった。主に島周辺、上沼側、清五郎潟で観察された。

マガン：11月24日に湖面上空で1羽が観察さ

れたのみで、鳥屋野潟でねぐらをとる個体は確認されなかった。

5. 考 察

ハクチョウのねぐらは、いずれの場所も比較的まとまった規模のアシ原付近であることから、風雪を軽減するためにアシ原の入り組んだ地形を利用しているものと考えられ、これらの条件がハクチョウの越冬に重要であることが示唆された。このことから広い鳥屋野潟の中でも、ねぐらとして利用できる場所は限られるものと思われる。

ヒシクイは過去の観察結果から、調査開始日前に飛来した可能性が高いと考えられる。秋冬期に鳥屋野潟をねぐらとして利用するヒシクイは10羽程度で、県内の他の湖沼に比べて少ないが、1月19日朝には411羽が確認されている。また定期調査日以外では、前日までに大雪が降った2001年1月14日(日)午後ヒシクイの大群(2000羽以上)が飛来し、その中にマガンの群れと8羽のハクガンが確認された。

鳥屋野潟は福島潟などの越冬地が積雪及び結氷した際の避難場所として利用されているものと推察される。

6. まとめ

毎週1回の調査結果を積み重ねることによ

ハクチョウのねぐら場所



図4



り、鳥屋野潟で越冬するハクチョウ類とガン類の個体数の変動および、潟の利用状況について概要を把握することができた。50万人都市の中心部近くに残された潟に2000羽を越えるハクチョウが飛来し、半年間もねぐらとして利用していることがわかり、あらためて鳥屋野潟が水鳥たちにとっていかに大切であるかを知ることができた。

しかし単年度の調査だけではデータが不十分であり、今後も継続調査を行ない、さらに日中の行動を調査するなどして、ハクチョウ類、ガン類をはじめとする水鳥たちが鳥屋野潟をどのように利用しているか明らかにし、潟の保全と野鳥の保護につなげていきたいと思う。

7. 謝 辞

水鳥越冬時期における瓢湖、福島潟、佐潟、鳥屋野潟の同時調査を提案し、各湖沼の調査データを毎週とりまとめてお送り下さった新潟市佐潟水鳥湿地センターの佐藤安男氏に心から御礼を申し上げます。また貴重な調査結果を提供下さった水原町観光管理事務所佐藤巖氏、豊栄市水の駅ビュー福島潟小松隆宏氏、小坂真也氏にも感謝申し上げます。

8. 参考文献

石部 久 1991 新潟市史・資料編12 (自然) 208～245.

「バードウィーク全国一斉野鳥販売実態調査2002」に今年もご協力をお願いします。

今年も引き続き、「バードウィーク全国一斉野鳥販売実態調査2002」を実施します。調査結果は、今までの結果と合わせて、全国野鳥販売の実態を把握し、野鳥の輸入禁止、違法飼養の根絶を目指す活動にいかします。今年もたくさんの皆様のご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

■調査の目的

野鳥輸入の禁止と違法飼育の根絶を目指して、ペットショップ等の野鳥販売の実態を把握します。

■調査主体

(財)日本野鳥の会、全国野鳥密猟対策連絡会の合同調査です。

■調査期間 5月10日から6月30日まで。

■調査対象

販 売 店・・・小鳥類を販売しているすべての店。
ペットショップ、鳥獣店、ホームセンター、百貨店やスーパーのペットコーナーなど。

鳥の種類・・・外国産鳥類を含むすべての野鳥。
ただし、人工繁殖されて売られている種類(セキセイインコ、ジュウシマツ、ブンチョウ、カナリアなど)は除きます。

■調査方法等

本誌に同封されている調査用紙をお使い下さい。調査用紙は下記のホームページからもダウンロードできます。用紙の返送期限は7月31日です。

■調査にあたっての注意

輸入された鳥類を販売することは、現在の法律では違法ではありません。調査の際には、販売店とトラブルにならないよう、十分にご注意下さい。

■調査結果の公表

調査結果は、『野鳥』誌上やインターネットで報告いたします。

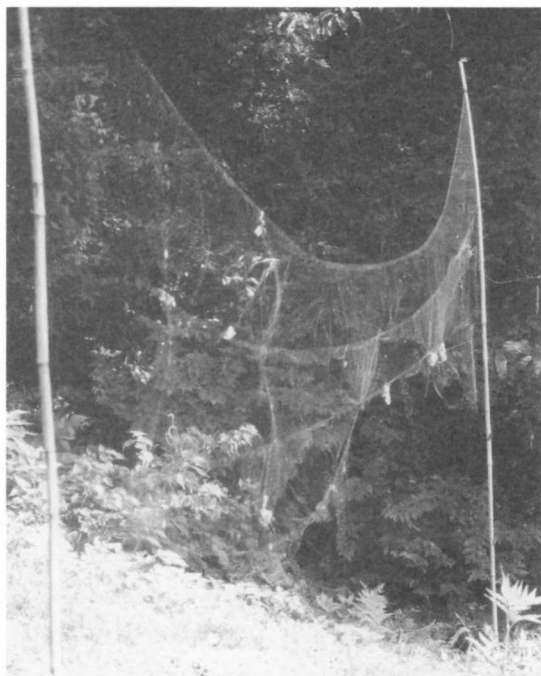
●問い合わせ、用紙返送、用紙請求は

(財)日本野鳥の会自然保護センター野鳥販売調査係
〒151-0061 東京都渋谷区初台1-47-1
小田急西新宿ビル1階
TEL.03-5358-3518 FAX.03-5358-3608
<http://www.wbsj.org/hogo/research/index.html>
E-mail:hogo@wbsj.org

カワセミ大量に殺される

西蒲原郡湯東村 赤塚政博

平成13年8月、早朝からフィールドのひとつである三条地区の溜池群を訪ねた。いつものようにカワセミの姿を探していると、逆光の湖面に細く銀色に光る張り網が見え、何かがからまっていた。双眼鏡で見ると緑色の鳥だ。急いで行ってみるとカワセミであった。「どうしてカワセミが？」と思いながら湖面を見直すと、その奥にまた網があり、さらに奥にもう1枚張ってあり、たくさんの鳥がかかっていた。なんと全てカワセミであった。数えてみると合計15羽、全て息絶えていた。巣立ったばかりと思われる幼鳥も確認できた。おそらく2組か3組の親子群ではないかと思う。いずれにしてもこの地区周辺のカワセミ全数であろう。怒りが込み上げてきた。いったい誰がこんなひどいことを。すぐにはずしてやろうと思ったがやはり届け出た方がよいと考え直し、携帯電話で三条の保健所に連絡した。保健所の指示通り市役所に行くと保健所の人に加え、連絡を受けた警察官も待機し



ており、その対応の速さに驚いた。すぐに全員で現場に直行し、カワセミの惨状を確認してもらった。保健所の人「これはひどい」と言い、警察の人はすぐに現場検証を行い、近隣の人家に確認を行った。その結果、網を張った犯人はその池の持ち主であることが判明した。池の魚を獲りに来るサギなどを防除したかったと言っているが、不特定の鳥を狙った張り網の使用は明らかに違法であり、15羽ものカワセミを殺したことは許されるものではないと憤った。そのあとの処理は警察にまかせて立ち去ったが、後日保健所から連絡があり、違反ではあるが、捕らえた鳥を販売するためではなく、また初めてということで嚴重注意となったとのことであった。いずれにしても死んだ15羽のカワセミはもう生き返らない。今後は2度と違法な張り網を行わないでほしいし、カワセミをはじめとする野鳥たちが適正に保護されることを願って止まない。



朝日池探鳥会レポート

編集部



ヒシクイとハクガン

2001年の11月23日に恒例の朝日池探鳥会が開催されました。ここでは、当日の様子をレポートしたいと思います。幸い天気にも恵まれ午前9時から探鳥会が始まりました。朝日池は例年より少し水が落とされていて、土がだいぶ見えていました。そのせいかカモの数は少ない感じでしたが、それでも様々な水鳥の姿を目にすることができました。この日まず目についたのは、何といても4羽のハクガンでした。近年、朝日池に連続して飛来しているとはいえ、探鳥会開始早々最初からこんなにじっくりと見られる機会はなかったと思います。飛んだ時も青空に純白が映え、とてもきれいでした。朝日池の多数派であるヒシクイやマガンも探鳥会の少数が池に見られたのですが、周辺の水田から頭上を通して、大きな群れがいくつも池に戻ってきて壮観でした。ガン類ではこの他にカリガネ、ヒシクイの小型亜種、シジウカラガンの小型亜種が朝日池周辺で見られているようですが、今回その姿を見つけることはできませんでした。カモ類では、他の場所では比較的見つけにくいトモエガモをやや遠いながらじっくりと見ることができました。他にもズガモ、ミコアイサ、カワアイサなどを加え全部で15種のカモ類が数えられました。このようにガン類やカモ類の種類が多いのは朝日池の最大の特

徴です。この日はさらに土の部分が出ていたせいか、ツルシギが出現し、何かに驚いて飛んだ後、池の中央部をガンといっしょに泳ぐ姿が見られ、参加者の目を惹いていました。

この日は祝日で、ハクガンの姿がじっくりと見られたこともあり県外のバードウォッチャーが多数訪れていました。群馬、埼玉、長野、富山、千葉、京都、東京などから来訪しており、情報交換も盛んに行われていたようです。参加者のみなさんも満足された様子で、11時に鳥合わせをして探鳥会を終了しました。参加者は40名でした。以下にこの日観察された種類を記します。

カイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、ダイサギ、アオサギ、マガン、ヒシクイ、ハクガン、コハクチョウ、オシドリ、マガモ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ズガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ミサゴ、トビ、タゲリ、ツルシギ、ユリカモメ?、ヒバリ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ツグミ、オオジュリン、カワラヒワ、ズズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス (合計38種)



鳥あわせ

追加 (探鳥会終了後～14時30分まで)
スグロカモメ成鳥1、幼鳥1 (探鳥会の中で確認されたユリカモメもスグロカモメであった可能性あり。九州北部に多く、世界的にみて希少種)。カリガネ幼鳥1 (他のガン類の群れの中にいた)、オジロワシ成鳥1 (田から飛来)、ヒシクイ小型亜種1 (マガンと同じくらいの大きさ)。

寺泊探鳥会に参加して

長岡市 横山美津子

冬が来ればオジロワシ。『待ってました』と、昼飯持参で朝から埒入まで信濃川で張り込む。この時期の河川敷は人気はなく、孤独と寒さが連れ添って訪ねてくる。訪ねて来てくれるからには丁寧におもてなしをする。そして、何となく頑張りが効かなくなる。そんな時分に寺泊探鳥会がある。名前がいい〔厳冬の日本海海鳥を訪ねて〕河川敷より厳しい場所へ出向くことで、安堵が生まれそれが優越感に変わる。なんだか分からないが兎に角変わる。鳥の出現数が多かろうが、少なかろうが、あのタラ汁をゴチになると、また頑張ろうと気合いがでてくる。河川敷でタラ汁は似合わない。第一オジロワシに悪い。

今シーズンは暖冬で、調査していても、孤独さと寒さが連れ添って訪ねてくるのが少なかった。それでも、2月3日の探鳥会に行きたくなって参加した。厳冬の日本海はこの日「春」だった。



ウミウ

【出現種】アビ・ハジロカイツブリ・ウミウ・カルガモ・マガモ・オナガガモ・スズガモ・ウミアイサ・トビ・ユリカモメ・セグロカモメ・オオセグロカモメ・ウミネコ・ハクセキ

レイ・セグロセキレイ・ヒヨドリ・イソヒヨドリ・ツグミ・メジロ・スズメ・ムクドリ・ハシボソガラス・ハシブトガラス・ヨシガモ（初確認）。延べ77種の出現になる。

さて、ここで出現種について少し考えてみた。クロガモとビロードキンクロは、探鳥会初期年代には常連さんであったようだが、近年はさっぱり組である。ヒメウも90年でさっぱり組に編入している。海鳥の花形アビを調べてみたら、アビ目は1属5種そのうちのハシグロアビを除く4種が日本に渡来する。5種の生態は似ているが、アビだけは少し違う点が目立つ。たとえばアビ類は換羽期が早春でいちどに抜ける。そのため数週間飛べなくなる。ただし、アビだけは換羽が繁殖終了後である。

次に常連さんのイソヒヨドリ。実はツグミに近い鳥で、岩が裸出する環境に棲む鳥は他にはイワヒバリくらい。食性は多様で、トカゲやフナムシ、飛んでいる昆虫、冬には植物の種子も食べる。ツツピーコピーと囀るが、私にはイソヒヨドリと聞こえる。梅干しとシソそこに番茶を注いだ二日酔いの嗜好品に雌雄両方の羽色を見る。二日酔いでお困りの際はイソヒヨドリと唱えて飲めば即効性が高まるや否や。お試しあれ。



イソヒヨドリ

第9次鳥獣保護事業計画への取組み

保 護 部

計画の基準について

平成14年度から5カ年間の第9次鳥獣保護事業計画は各都道府県が策定するが、環境省は改正鳥獣保護法との関連もあって、早くからこの事業計画の基準作りに着手した。平成12年に専門家やNGOも加えて基準の素案を作り、10月にはパブリックコメントを募集した。これには日本野鳥の会本部からの要請もあって、当支部も2つの追加修正意見を提出した。一つは鳥獣保護区設定の際の地元関係者の合意形成に関して、もう一つは保護区の拡大についてであった。このパブリックコメントには本部はもちろん、各支部からも多くの意見が出された。その後、これらのコメントをもとに素案は修正され、中央の自然環境保全審議会の審議承認を経て、基準は平成13年1月の官報に報告された。各都道府県はこの基準にもとづいて、平成13年度中に第9次鳥獣保護事業計画を策定することになった。

本県の計画策定に対する要望

平成13年3月、本会保護部は県環境企画課鳥獣保護担当係の方へ、策定にあたって関係者に説明や意見聴取を行うかどうかを打診し要望した。県は4月23日に新潟県野鳥愛護会



鵜ノ池の鳥獣保護区分（実線で囲まれた内側）

と当支部、それに野柴木洋氏（個人）に連絡して、説明と意見聴取を行った。支部はこの時理由を付した書面で、次の事を要望した。

1. 鳥獣保護区の拡大および昇格について
 - (1)大潟町鵜ノ池の鳥獣保護区への編入
 - (2)同朝日池の国設鳥獣保護区への昇格
 - (3)各市町村に少なくとも1カ所の保護区設置
2. 有害鳥獣駆除に当たり対象外の鳥獣を駆除することのないよう適切な指導の必要性
3. 鳥獣保護員として保護団体からの任命増員
4. 愛玩飼養制度の全敗

県の対応と見解

1- (1)の鵜ノ池については、出先の上越保健所が対応し、関係機関・団体の合意形成のため、6月と7月に大潟町で2回の会合を設定した。1回目は、この事業や基準の説明と、保護区化を提唱した当支部の説明であった。保健所も鵜ノ池の全面保護区化の案を持って望んだ。私も資料やデータをもって説明した。猟友会以外では大方了承したようであった。2回目は大潟町の猟友会のメンバー20人程と、当支部（私1人）の話し合いだった。猟友会の言い分は「朝日池が保護区になっているのに、その上鵜ノ池までとは承服できない」というものだった。鵜ノ池も最近天然記念物のマガンやオオヒシクイがねぐらとしていたり、ワシタカ類の希少種が猟期以外に出現することなどを挙げ、その重要性を強調したが納得されなかった。結局、現在造成が進められている大型都市公園の区画内なら致し方なかろうということになった。それは図のように鵜ノ池湖面の南側部分および東側部分を分断して引いた線より内側部分となる。

1- (2)朝日池の国設鳥獣保護区昇格については、環境省の所管事項なので、県でも北関東地区自然保護事務所新潟支所へ上申し、

また支部としても連絡をとって打診したり、朝日池の資料を送ったりしたが、国設の保護区候補地が相当あって、今回は無理のようであった。（5年後の第10次に目指したい）

1-(3)保護区の設定は、基本的に地元市町村などからの要望・申請があって進められるので、保護区を設けたいところは市町村を通して申請し、関係者の合意が得られれば可能となる。今次の計画では県内で新たに4ヶ所の保護区が設定される。

2. 有害鳥獣駆除にあたっては、対象外の鳥獣まで駆除することは、明らかに違法行為であるから、そうした確実な事実があれば、地元の保健所か県の環境企画課へ知らせて欲しいとのことであった。

3. 鳥獣保護員は市町村の推薦によって任命しているので、保護団体も保護員のできる方は市町村より推薦していただくようお願いしたい。因みに平成13年度県内の鳥獣保護員は112名、大体各市町村に1名で大きい所は2名以上、狩猟免許者は半数位とのこと。

4. 愛玩飼養については、狩猟法の改正でメジロとホオジロの2種のみとなったが、本県では最近殆ど許可申請はないということで、今後の事業計画では捕獲許可はされないことになる。従って現在許可を受けて飼養しているメジロ・ホオジロ（改正前の狩猟法によるマヒワ・ウソも含めて）など、寿命が来たらその後捕獲できないのだから、これらの飼養はなくなってしまうことになる。しかし、密猟や不正輸入などにより飼養は絶えないかも知れない。

なお、改正鳥獣保護法のポイントの一つとして、特定鳥獣保護管理計画制度が導入され、必要によって今次計画に盛り込まれることになったが、本県としては県北地帯の野猿の被害が増えていることから、その調査が盛り込まれた。野鳥については特にこの面で盛り込まれたものはない。

今後について

今次計画の鳥獣保護区に関する要望として、

鵜ノ池と朝日池を取り上げたが、県内には保護区にしたい候補地がまだ多くあるものと思われる。そうした所は5年後の第10次計画を目指して着々準備しておくことである。生息・渡来する鳥のデータは必要なので、頻繁に観察して記録をとっておく。年に何回かセンサス調査をしておけばなお良い。そして市町村に積極的に働きかけて申請し、関係者の合意を得るようにする。

鳥獣保護員にも本会会員が多くなって欲しいところである。会員の中である程度余裕があって、鳥獣保護員ができる方がいたら、在住する市町村で推薦してもらおうよう働きかけていただきたい。自薦はなかなかできないので、他の会員からの他薦をお願いしたい。

愛玩飼養のための捕獲はできなくなるが、密猟などは依然として絶えないと思われるので、現場を見つけたらすぐ110番して、警察を呼ぶようにする。（支部報 No.50参照）

ともあれ、日本野鳥の会会員として、「自分にもできる保護活動」を心がけたいところである。（担当：山本 明）



鵜ノ池（丸山対岸の南岸より）

シギ・チドリ類の渡来地 諫早干潟を救おう！

5月末までに緊急署名にご協力ください。

署名の郵送先・署名用紙の請求先は「全国小鳥店調査」と同じ(財)日本野鳥の会自然保護センター(TEL 03-5358-3518)まで
(※署名用紙の返送については、ご郵送ください。)

冬の佐渡航路

佐和田町 末崎 朗

冬の海上観察

佐渡に転勤してからというもの何かと佐渡航路のフェリーに乗る機会が多くなりました。本土と佐渡を結ぶ航路は両津～新潟間、赤泊～寺泊間、小木～直江津間の3路線があり、それぞれフェリーでは2時間から2時間半の行程です。その間寝ているのも退屈なので、できる限り海鳥の観察をしています。船上での観察を始めた昨年の春には冬の佐渡航路は海がかなり荒れると聞いていたので鳥を見るどころではないだろうと思っていました。しかし、この冬は比較的穏やかな日に船に乗る機会があり、何度か船上から観察をしました。夏の佐渡航路はウミネコとミズナギドリがほとんどで、種類がかわりばえせず面白味に欠けるのですが、冬はオオミズナギドリが見られなくなるもののカモメ類、カモ類、ウミスズメ類などが多く見られるようになり、楽しみも増します。ただし夏と違って寒いので甲板には出ずに船室内から窓ガラスを通しての観察になります。そして楽しみが多いとは言え、太平洋上での観察とは違い日本海上では鳥の数も少なく、2時間から2時間半観察を続けるのは多少なりとも集中力が必要であることは確かです。

沖で見られたカモ達

ここではまず観察の条件が一番良かった1月14日の観察の様子について述べたいと思います。この日は真冬の新潟にはまずないと言ってよい程快晴の日でした。海はほとんど波もなく、風もあまり感じられませんでした。私は直江津港を13時40分発、小木港に16時10分着予定のフェリー、こがね丸に乗船しました。直江津港では、カンムリカイツブリ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、ハシブトガラス、ウミウ、カルガモ、ミサゴなどが見られ

ました。港を出て少し経つとウミネコやオオセグロカモメに続いて数10羽のカモ達が目につきました。これらはカルガモ、マガモ、コガモで、海上に浮かんでいたのが船に驚いて飛び立ったようでした。直江津～小木航路の距離は78kmで、出航してからの時間から考えると4～5kmぐらい沖であると思われました。さらにもう少し進み10km～15km沖にも今度はマガモを1000～1500羽程も観察することができました。私はこの頃の天候はたいへい大荒れで、カモ類の一斉調査を行っているとはよく港の中により多くのカモ類が見られることを思い起こし、「天気良く波もないとカモ達もこんなに沖まで出るものなのか」と不思議な気持ちになりました。この時見られたカモはいわゆる淡水ガモと呼ばれ、採餌のために水中に潜らないカモ達で、こんな沖で餌をとっているとは考えにくい種類です。また、海上は確かに天気が良ければ体力も使わず、敵も少ない居心地のよい休み場所と思われませんが、何も陸から遠く10km離れた沖まで来る必要はない気がします。根拠はないのですが、この時期このカモ達は日本海を通過して移動している途中なのかもしれません。そう考えると大荒れの天気時に港の中にたいへんな数のカモが見られ、比較的穏やかな日にはあまりその数が多くないのも、こんな沖にもカモの姿が見られるのもつじつまが合うような気がします。いずれにしても、もっとこの時期の海上での観察記録を増やしていかないと詳しいことはわからないと思います。

現れたコアホウドリ

カモの群れを見たあたりから少しづつカモメ類が目につくようになってきました。1～4羽程で、群を作る感じではなく個々に間隔をあけて餌を探し回っている感じでした。海

上で遠くを飛ぶカモメ類を識別するのは、なかなか難しく不明種とするしかない個体も多かったのですが、この日のカモメ類はだいたいウミネコとオオセグロカモメであったと思います。だいたい24羽程のカモメ達が通り過ぎた後で、予想もしていなかった鳥が悠々と飛んでいるのが目に入り、船室内に他の乗客もいるのに思わず大声を上げそうになりました。カモメ類に比べて翼がはるかに長いその鳥はコアホウドリでした。しかも2羽が、穏やかな陽射しの中を全くはばたかないアホウドリ類特有のソアリングという飛び方で、船のすぐ近くからゆっくりと遠ざかていきました。コアホウドリは新潟県では西蒲原郡の海岸で1975年2月11日に1羽の死体が拾われているだけで（「雪国を訪ねて」日本野鳥の会 新潟県支部編による）他の記録はいままでにはないようですので、生きていた姿としては初記録のようです。ちなみに太平洋では1月でも普通に見られる鳥です。この日も前日も天気は大荒れではなく、特に傷ついた感じではなかったのですが、そのうち天候が悪化するであろう日本海をゆくコアホウドリのこれからが心配になりました。直江津から約35km沖での観察でした。

この後もウミネコ、オオセグロカモメを中心としたカモメ類が間隔をおいて現れる様子は変わりませんでした。ただコアホウドリを見てから5分後にカモメが8羽、比較的せまい範囲で餌を探すのが観察できました。ウミネコやオオセグロカモメは比較的高い位置を飛びながら餌を探す様子でしたが、カモメは海面近くを速いスピードで飛んでおり採餌方法が違う印象を受けました。

小木港に近づいた16時にはマガモが3羽見

られ、ここから小木港内までウミウが5羽見られました。直江津港から小木港までこの日観察できた鳥は以下のようにになりました。カンムリカイツブリ6、コアホウドリ2、ウミウ6、マガモ1000~2000、カルガモ18、コガモ8、ミサゴ1、トビ5、ウミネコ24、カモメ8、オオセグロカモメ16、カモメ類不明種9、ハシブトガラス2。



新潟西港内の海鳥たち

船上観察の楽しみ

もちろん冬の船上観察はこんなに条件に恵まれる日ばかりではありません。2月11日には同じ時間の同じコースに船に乗りましたが、天気が荒れ気味だったこともあり、ウミウ4、ウミスズメ不明種2、トビ2、ウミネコ10しか観察できませんでした。しかし、2月26日に9時10分両津発新潟行きフェリーに乗ったときには、船の近くでウミスズメやウトウが見られたり、新潟西港内でシロカモメのきれいな成鳥が見られたりと普段あまりよく見られない鳥たちを見る機会が多いと感じます。今後はもっと観察の回数を増やして天気、時期、時間、航路の違いなどで見られる鳥がどのように変わるかを明らかにしていければ、いっしょに船から観察してくれる人も現れるのではないかとささやかな希望を抱いている今日この頃です。

発行 2002年3月31日 No.53

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒950-0941 新潟市女池3丁目13番25号

TEL 025-285-2405 本間由紀子方 (振替口座) 00610-1-6002